

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

和装の魅力「江戸組紐」を日常の道具に

中村 航太 千葉／江戸組紐職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:レクサス)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりに応援

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやWebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。



プレゼンテーションの様子

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたか足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また、商談会の終盤ではチームスジャパンとのコラボレーション企画「THE NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らし」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。



1月17日、プレゼンテーションにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。千葉県選出の匠、江戸組紐職人の中村航太さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

名脇役を主役に抜てき 組紐のクラッチバッグ

和装の魅力をきりりと引き立てる名脇役「江戸組紐(くみひも)」。松戸市で創業125年の江戸組紐製造・卸業の「株式会社中村正」の4代目で職人の中村さんは組紐を主役にしたクラッチバッグ(大・中)とスマートフォンケースを製作した。

江戸組紐は、3500種類の絹糸で組み上げる伝統工芸品。現在はその光沢の美しさから着物の帯締めなどとして親しまれていながら、江戸時代にはその強く丈夫で実用的な一面から刀剣に使われていた。

今回のプロジェクトで中村さんは当初、組紐ストラップを考えていたが、「他にないか」と各種バッグの製作を試行錯誤。8月のエリア・コンサルティングで、試作品のクラッチバッグが生駒氏に評価され、方向性が定まった。11月のプレ・プレゼンテーションでは、小山氏から「大きい物があれば面白い」とのアドバイスを受け、大きいバッグ

後世に技術を継承したい 新製品開発にも意気込み

高校在学中から自宅で組紐づくりを習い始め、26年間、組紐と向き合ってきた中村さん。日ごろは「帯締めに主役にしたくない。主役は着物を着る人。その着る人と着物の魅力を引き上げる最高の脇役をつくりたい」と、引き立て役としての組紐の価値に重きを置き、千葉県指定伝統的工芸品の指定を受けるなど数々の実績を積んできた。

今回のプロジェクト製作では普段脇役の組紐を主役にするために、紐の組み合わせだけでしま模様をつくり、広い面積を構成することに挑戦した。ただ、当初は「難しい」と思い、なかなかスタートが切



商談の様子



中村 航太 千葉／江戸組紐職人

1974年「江戸組紐中村正」(1893年創業)の四代目として千葉県松戸市に生まれる。1991年千葉県立国分高等学校在学中に自宅にて指導を受け、家業の組紐を始める。1999年大塚テキスタイルデザイン専門学校工芸染織科卒業、家業の(株)中村正に入社する。千葉県指定伝統的工芸品の指定を受ける他、2016年、2017年と2年連続で東日本伝統工芸展に組紐作品で入選。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT



中村さんの作業風景

れなかった」と明かす。それでも挑み続けたのは、「組紐や絹糸に興味を持ってもらい、20〜30代で組紐を組む仕事をしたいと思う人が現れてほしい」と思ったから。「自分は素晴らしい帯締めに育てきた最後の世代。年々、素晴らしい帯締めを作れる先輩が減っており、後世に(技術を)残したい」と後継者育成へ責任感と危機感を抱いていたからだ。

今回のプロジェクトを経て「チャレンジはするべきだ。自分一人ではなかなか新しいことに挑戦できないが、こ

も作るようになった。

組紐でバッグを作り始めた当初、中村さんは紐の端の房飾り(フリンジ)をどう隠すかばかりを考えていたという。生駒氏のアドバイスを受

け「フリンジこそ絹糸の魅力。無難を狙わずチャレンジしたかった」とあえて大きなフリンジを前面に出すデザインにした。

「見たら触ってみたくなる

よう演出した」というフリンジは、感触もよく、持ち運ぶと揺れる。「見た人からは「かわいいと好評」と手応えを感じている。

いう機会があると発表期限に向かって目指すことができ。普段は会うことすら難しいプロの方々に直接アドバイスを頂き、非常にありがたかった」と振り返る。

今後の活動については「本業の着物の帯締めに維持しながら、他の事もチャレンジしていけたらと思う。一度違うことをやると、他の事にチャレンジしやすくなる」と、本業を大事にしながらも新たな製品開発にも意気込みを見せた。



完成プロダクト「クラッチバッグ大」